

| | | | |
|---------|--|---------|-------|
| 氏名(本籍) | 武井敦史(神奈川県) | | |
| 学位の種類 | 博士(教育学) | | |
| 学位記番号 | 博乙第1593号 | | |
| 学位授与年月日 | 平成12年3月24日 | | |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第2項該当 | | |
| 審査研究科 | 教育学研究科 | | |
| 学位論文題目 | クリシュナムルティ・スクールの民族誌的研究 —インド農村部の私立学校における知の構造— | | |
| 主査 | 筑波大学教授 | | 小島弘道 |
| 副査 | 筑波大学教授 | 博士(教育学) | 宮寺晃夫 |
| 副査 | 筑波大学助教授 | 教育学博士 | 窪田真二 |
| 副査 | 筑波大学教授 | 教育学博士 | 落合良行 |
| 副査 | 筑波大学教授 | 博士(文学) | 小野澤正喜 |

論文の内容の要旨

1. 論文の構成

本論文は、序章、終章を含む七つの章から構成されている。頁数は、本文169頁(1頁当たり1,720字)、資料12項、参考文献9頁である。

2. 論文の内容

本研究の目的は、インドの私立学校であるクリシュナムルティ・スクールを題材にして、その生活世界に組み込まれた知の生成構造を解明することにより、現代の学校における知の姿を相対化する視点を見出すことである。そのために本論文では、①村の社会・文化構造と教育への要求、②教育観・教育理念とその形成過程、③学校の生活と教育の実態、の三つの視点から、クリシュナムルティ・スクールの知の特質とその存立構造を明らかにした。

序章では、上記の研究の目的を述べた後で、それを達成するために設定した次の研究課題を示している。①学校知の議論における問題と本研究との関係及び民族誌的方法の特色、調査対象選定の根拠、資料収集の性質、②調査地域の社会、文化、子どもの生活と教育、③クリシュナムルティ・スクールの教育観及びその形成過程、④クリシュナムルティ・スクールの教育内容・方法、学校経営の実態と学校成員によるその解釈、⑤以上の作業を通して浮かび上がるクリシュナムルティ・スクールの知の特質と存立構造について解明する。

第1章では近年の学校論での学校知の議論における問題の所在と本研究の位置づけを行った上で、本研究の方法である民族誌的方法の特色と理論的基盤、調査対象選定の根拠とその特徴、収集資料の性質等について論述した。

第2章は調査対象学校のSadhana Vidya Nilayam(SVN)について、それが位置する地域の初等教育の状況と教育対策について説明し、村の人口構成・社会組織・権力構造、村の経済や産業、村のカースト構造、生活習慣、宗教と信仰、娯楽及び遊び、村の児童の仕事と学校教育について論述した。第3章では、SVNの教師が教育の姿をいかなる形で価値づけているかを明らかにする視点を獲得するために、SVNにおける教育観(「教育に関する望ましい

あり方について、通時的に抱えている意識の言語的な表明))と教育観が形成されるに際しての学校設立者のライフヒストリーを明らかにした。

第4章は、SVNの生活と教育の実態を、学校設立過程、学校の成員と経済運営、学校の一日、教育活動、規則と賞罰の面から、主に学校成員によって解釈され、意味づけられたデータに基づいて明らかにしている。それによると、学校成員の学習や仕事が強く他に依存している、生徒との関係は必要な活動を介して形成されている、「公平」ということが相対的に見られない、仕事・役割とそれを行う主体の間には特定の対応関係はない、子どもの生活において自然環境が対立的・操作的な位置に置かれていない、学校の生活空間が学年等の所属によって分断されておらず、その全体が緩やかに連結された生活世界を形成している、子どもは自然環境と身体性を帯びた相互行為によって結びつけられている、時間の区切りがルーズである、時間の私事性が弱く、時間が所有の対象として価値づけられていない、などの実態を浮かび上がらせている。

第5章では、第2章から第4章までの作業によって構成される民族誌によってクリシュナムルティ・スクールの特徴を、①人間関係、②自然・環境との相互行為、③時間構造と動機づけの観点から浮き彫りにしている。さらにこれらの特徴を価値の側面から検討し、クリシュナムルティ・スクールの特徴を次の三点にまとめた。①学習や生活における知識と技能は生徒個人や教師個人というものを超えて、それは生徒と教師の相互行為が成立するための媒介物として考えられる特徴が見られる。したがって学習の評価も相互行為という関係性の中で確認されるという傾向を持つ(「自他の連続性」,「全体性」)。

②「知る事」は客観的存在としての事物の認識ではなく、「知る事」の中に感情や審美性を伴う自分自身の経験が含まれる、経験的に把握される知である。

③学習が経験の動的な過程である。

以上の研究の結果から、SVNの知の在り方の特徴は、自己を基点として事物の他の人間や目的を対象として得られる知の姿ではなく、経験に埋没している知の姿であり、「融合的な知」と呼ぶことができることを指摘している。この「融合的な知」が積極的に形成されている点にクリシュナムルティ・スクールの特徴と意義を見出した。

終章では、①「融合的な知」の研究的位置づけ、②「インディ」なるものの理解をめぐる問題、③本研究で対象とした事例の位置づけ、④民族誌自体の問題、の四点を残された研究の課題としている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、次の理由により、従来の研究に見られないオリジナリティを持ち、かつ教育の学術研究の向上と発展に貢献するところが大きい研究であると評価できる。

(1) 本研究は、これまで教育学の領域ではもっぱら発展途上国として扱われてきたインドの学校の意義を文化論的視点を導入することにより再発見し、学校知の研究に新たな地平を切り開くものであるという点で独創性が認められる。

(2) こうした知のかたちと性質を明らかにするためにインド農村社会の私立学校を対象に民族誌を作成している。知のかたちと性質は意識調査等の定量的データから直接得るには限界があり、学校の学習や生活の中に顕われた特徴を記述し、それらを記号として読み解いてゆく民族誌的方法を採用している。これは数回にわたる現地調査(参与観察など)を通して得たもので、本研究の目的解明にふさわしい、かつ有効な方法であると評価できる。

(3) 本研究は、「融合的な知」の視点を導入した学校知の再構築を主張している。その観点から学校での学びと生活を再構築していくことが、いじめなどの現代の学校問題を解決する道であることを提言している。

ただし、「融合的な知」が現実の日本の学校の中でどのような形をとりうるか、学校経営の中でそれをどう課題としうるかについては必ずしも十分に論じられていない。これは、インドの学校を通して現代の学校知の在り方

を考える視点を提供するという研究の意図や方法そのものに内在する限界というべきものであって、「融合的な知」の必要、それを通した学校像の構築という著者の主張の妥当性を否定するものではない。

なお、問題意識にあった現代学校の知の在り方と実証によって描いたインド農村学校の知の姿がどのように統一されるかという点では課題を残しているが、これによって本研究の価値や学術性が低下するものではない。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。